

編者はしがき

本書には、前巻に続く久遠仮性篇のうち、第七章「久遠を流るるいのち」及び第八章「吾等の祈願及び修養」の全十六項目の内、十三項目までが収録されている。

第七章の「久遠を流るるいのち」とは「大生命」即ち「神」のことである。そして本全集『生命の實相』の書き手は「久遠を流るるいのち」であり、聖書や仏典同様、著者名がない。もちろん現実世界の出版事情を考慮し、「谷口雅春著」と記載されてはいるが、「生命の實相」の眞の著者は、天界より天降つて「真理」を鳴り響かせている「久遠を流るるいのち」であると谷口雅春先生は明言しておられる。そして、次のように語

られるのである。

「諸教は私にとつてはその夾雜物を除いたとき、いずれもただ一つ、「久遠を流るるいのち」の表現であつた。すべての宗教はこの「久遠を流るるいのち」によつて互に手を繋ぎ合わせるべきものではないだらうか。救われるのは宗教の儀礼によつてではない、ただこの「久遠を流るるいのち」によつてである。いのち！ いのち！ 私はいのちの衝動を感じて『生長の家』を、『生命の實相』を書きはじめたのであつた。これの本当の著者は「久遠を流るるいのち」である。そして『生長の家』を創めたのは「久遠を流るるいのち」であったのだ」(四六頁)

本全集の第一巻でも「私がペンをもつて机に向うとき、私はもうふだんの私ではないのである。靈來りて私を導く。弱い性質の私にはとても書けない強い言葉が流れるように湧いて来る」(一九二〇頁)と書かれている。

そして、幾人もの人々に「白髪の老翁」の姿を現し、埼玉県の笠原政好氏に至つては靈眼によつて谷口雅春先生の執筆時の情景をありありと凝視したのである。

「まだ何行とも書かぬ中先生は無我の中に置かれ、またたく間にベンのスピードは前とはまるで変わつてくる。走る走るあらうと思う間もなく全然先生とは異つた人になつてゐる。口許の締つた、あご髭の胸まで垂れ下つた、見るだに氣高き靈人だ。あれ先生はどこにと、見詰めた。ああ先生は靈人の内に融け込んでゐるのだ。靈人は全支配権を握つて、わき目も振らず書を進めて行く。あれ何んという、推敲もせらずしてペンの早さは目も及ばぬ程だ。まあ不思議なこと一体どこから來た方だろう。靈人の体から神々しい靈光が放たれ付近は光明淨土と化した。静寂また静寂、付近はまだ靈人の占領地となつてゐる。やがてベンははたと止み、靈人はどこにか姿を消してしまつた」(新編『生命の實相』第一卷二二一三三頁)

この「靈人」は、「久遠を流るるいのち」が具体的に姿を現したものであろう。そしてこの「久遠を流るるいのち」は帆遊の裡にも現れ、キリストの裡にも現れ、アメリカのニュー・ソートの思想家達の裡にも現れ、およそ正しい教えを説いた宗教家、哲学者、思想家の裡にも現れた。時と處に応じて、様々な姿・形をもつて、ただ一つの「久遠を流るるいのち」から發出しているからである。

「久遠を流るるいのち」が千差万別の相をもつて顯現したのであろう。

谷口雅春先生は「万教帰一」を説かれる。即ちすべての正しい宗教は同じ一つの真理を説かれないと説くのである。なぜならそれらの教えはすべて「久遠を流るるいのち」から發出しているからである。

次の第八章「吾等の祈願及び修養」は「生長の家とは如何なるものか」と題されて單行本としても発行されている。當時、出版元が「生長の家」の教えの入門書的な書籍の発行を谷口雅春先生にご相談したところ、この第八章をそれに当てるよう指示されたといわれている。

確かに、この章は「生長の家」の誕生やその特徴の解説から始まつて、「人間神の子」の真理を生活に生かすこと、そして一切万物に感謝すること、心の波長を神に合わすこと、自分や他人の「惡」を見ずに光明面のみ見ること、何者にも何事にも恐れず神とともに生きること、自分ばかりではなく隣人をも真理を伝え幸福生活に導くこと、神を愛する如く自分を愛すること、皇室と自分の祖先を敬うこと等、人間が持

つべき心のあり方が述べられている。

ここで谷口雅春先生は「七つの自覺の心」を挙げておられる。平和の心、明るい心、悦びの心、深切の心、有難い心、無我の心、自在の心である。その七つの心を持すれば健全なる肉体が現れ、逆にその反対の心である不安、焦躁・恐怖の心、暗く陰鬱な心、不平・不満足な心、冷淡な心、忘恩の心、利己的な心、一事物に引っかかる心などの「七つの迷いの心」が病氣を起こし、その症状は「心の状態相應の形をもつて現れる」と説かれている。

「欠点と暗黒とはあるよう見えても本来ないものでありますから、心に描かずに捨て置けば消えるのであります。美点と光明とはないように見えても本来実在なのですから、心が執われなくなったときその本来のある姿があらわれて來るのであります。だから生長の家家族の祈願には自他の悪を云々為する時間があるならば、神を想い、完全を想い、自己の新生と生長とを努めようではないかと書いてあるのであります」

(二二二頁)

編者はしがき

まことに、この第八章は谷口雅春先生が説かれる「眞理」を生活に活かす上で欠かすことの出来ない「心の持ち方」が徹底的に詳述されている。是非とも熟読の上、実践されることを願つてやまない。

令和二年十月吉日

谷口雅春著作編纂委員会